

1. 単元名 ゆかし里に流れる秋篠川の魅力を発見し、川柳で未来へつなげよう

2. 単元の目標

- ・言葉には思ったことを表す働きがあることに気付くことができる。 (知識・技能)
- ・経験したことを比較したり、分類したりして伝えたいことを明確にすることができる。 (思考・判断・表現)
- ・自分の川柳のよいところを見付けることができる。 (思考・判断・表現)
- ・秋篠川に関心をもつとともに、未来へつなぐ担い手として自分たちの想いを、言葉の見方考え方に気付きながら伝えることができる。 (主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1)教材観

本学習は、わが校の校歌にある「ゆかし里」という言葉をもとに、秋篠川という子どもたちにとって当たり前にある地域の川に注目させ、秋篠川の役割に気付き、この役割が様々なつながりをもっていることを知り、自分たちも未来へつなぐ担い手としての行動宣言を地域に発信すること目的とした。この目的を達成するために、「秋篠川の役割」と「川上村の音無川の役割」を教材化した。

1 つ目の「川上村の音無川の役割」とは、水源の森としての役割である。川上村では、1996年全国に向けて『川上村に暮らす住民はもちろん、下流域の人々とも手を携えて、かけがえのない水と森を育てていきたい。』という考えのもとに「川上宣言」を発信している。この宣言を知ることで、源流に住むものとして美しい水を下流や海まで流し続けていく責任感に気付くことができる。また、川の環境を守ることは下流の地域を豊かにすることができるという自己有用感に気付くこともできる。このように、「川上村の音無川の役割」を教材化することで「川は人々の思いをつなげている」ことに気付かせることができる。

2 つ目の「秋篠川の役割」とは、平城京の時代に人の手で作られたという歴史的な役割である。この川が作られたことにより、物流を運搬し繁栄させたことや、地域の米作りの農業用水として活用されてきたことなど平城の町の歴史を紡いできた存在として気付くことができる。また、川沿いの桜並木は、景観をととのえているだけでなく、桜を見に来た人々により、川沿いが踏み固められ、川の氾濫を防ぐ助けにもなっている。さらに、現在も田畑をうるおす役割を担っている。このように、「秋篠川の役割」を教材化することで、「川の歴史的な思いが現在までつながっている」ことに気付くことができる。

このように、「川上村の音無川の役割」と「秋篠川の役割」を教材として使用することで、「ゆかし里に流れる秋篠川の魅力を発見し、言葉で未来へつなぐ」ということを自分事としてとらえ発信できるようになると考えた。

(2)指導観

本単元で大切にしたいことは思いを言語化し川柳にするという活動である。川柳にするということは、自分が体験や経験したことをよく思い出し、言葉を精選しながら、言語化するということである。言葉を精選するときに、体験や経験の見方・考え方を深めながら、何度も考え直し新たな気づきが生まれる活動になる。また、川柳を交流させることで、友達の考えからも新たな気づきが生まれるだろう。教科書にはない、身近にある「秋篠

川」を教材化したことにより、一層深く言葉の見方・考え方を深めていける活動を目指す。

そのために、まず地域の秋篠川について知っていることを出し合う。児童は秋篠川が地域に流れている川という認識だけで、どのような川なのか知らないことに気づく。そこから、「地域の秋篠川はどのような川なのだろう?」という学習問題を設定する。秋篠川の近くにある「龍王神社」を見学にいたり、実際に秋篠川に入り川の様子を調査したりする。それを、模造紙にまとめ、川柳にして思いをのせることで、今までにない川の魅力の発見につながると考える。しかし、「川の役割」や「川を守ってきた思い」にまで目を向けることはできない。そこで、森と水の源流館と連携をし、秋篠川ではなく、少し離れた音無川について「音無川には様々な役割がある」ことや「どのように守ってきたのか」を体験するために社会見学を行う。ここでも、学んだことを模造紙や川柳にまとめる活動を行う。

このような活動から「秋篠川は自分たちに関係している魅力ある川だ」という気付きさせる。秋篠川を自分事として感じることで、「秋篠川の魅力を守るためには、自分たちになにができるだろう」という問いが生まれる。そこで、いままで書き溜めてきた川柳を使い「かるた」を作ることを伝える。このかるたを3年生と一緒にする計画をたて、楽しみながら学んできたことを伝えていく。この際、「かるた」は4年生が作ったものだけでなく、教職員・地域の方・保護者など様々な人に協力してもらいながら作成を進める。さらに、かるたを書く材料を川上村からでた端材を使用する。世界に一つしかない木で作られたかるたを手で交流することで、1年の活動が思い出となり児童の心に刻まれるだろう。

これらの活動を行うことで、未来へ町をつなぐ担い手として自分たちができることを問い続けられるような自己の生き方を見つめられる児童を育てることができると考える。

(3)この題材で働かせる ESD の視点(見方・考え方)

【責任性】 秋篠川の役割を守り未来につなげていくために、自分たちできることを考える。

【相互性】 川の多面的な役割が自分たちの生活に深く関わっている。

・本学習で変容を促すESDの価値観

【世代間の公正】自分の世代だけでなく秋篠川魅力を未来へつないでいこうと考え行動する。

【幸福感】秋篠川の役割の恩恵により生活が豊かになっていることに感謝し、秋篠川を大切にする。

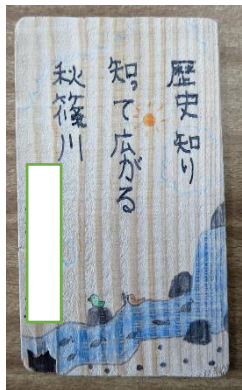
・SDGsとの関連

目標11 住みよいまちづくり 目標14 海の豊かさを守る 目標15 森の豊かさを守る

4. 評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
①言葉には思ったことを表す働きがあることに気付こうとしている。	①経験したことを比較したり、分類したりして伝えたいことを明確にしようとしている。 ②自分の川柳のよいところを見付けようとしている。	①秋篠川に関心をもとうとしている。 ②未来へつなぐ担い手として自分たちの想いを、言葉の見方考え方に気付きながら伝えようとしている。

5、単元の展開

	学習内容	●留意点 【評価】
1 学 期	<p>○秋篠川について知っていることを確認する。</p> <p>○学習問題を作る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">平城地域の秋篠川は、どのような川なのだろう</div> <p>○県河川課の方と秋篠川の水生生物指標調査を行う。</p>	<p>●留意点 【評価】</p> <p>●秋篠川的环境について興味を持たせる。【主体的①】</p> <p>●指標調査から秋篠川の水質を分析し、秋篠川がどのような川であるかを考えさせる。</p> <p>●音無川の多面的な役割が秋篠川にもあるか、興味のある役割をグループに分かれて調べ、まとめ、川柳を作らせる。【思・判・表】【知識・技能】</p>
2 学 期	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">秋篠川と音無川を比べてみよう</div> <p>○遠足で川上村の吉野川源流へ行き、生物調査をし、森と水の源流館の見学から、川を守ってきた思いに気付く。</p> <p>○気付きを模造紙、画用紙にまとめ、川柳にして気持ちを綴る。</p> <p>○模造紙と川柳を尾上さんに発表して評価をもらう。</p> <p>○音無川と秋篠川のつながりに気付きから、新しい学習課題をつくる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">秋篠川を守るためには、自分たちになにができるだろう</div> <p>○屋久島の小学校と川柳交流会を行う。</p>	<p>●音無川の生態系を理解させるために、水中、陸上の生物調査や植物観察をさせる。</p> <p>●音無川に多面的な役割をグループに分かれて調べまとめさせ、川柳を作らせる。【思・判・表】【知識・技能】</p> <p>●自分たちの学んできたことと川柳で比較する。 【思・判・表】【知識・技能】</p>
3 学 期	<p>○いままで書き溜めた川柳を「かるた」にする。</p> <p>○地域の方に声をかけ、秋篠川に関する川柳をまとめる。</p> <p>○川上村の木に川柳を書き込む。</p> <p>○3年生とともに、「秋篠川かるた大会」を行う。</p>  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">書いた川柳を取り札にしてかるた大会を行う</div>	<p>●自分たちがいままで当たり前にしてきたことを振り返らせる。</p>  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">一年のまとめの川柳を木に書き込む</div> <p>●未来へつなぐ担い手として自分たちの想いを、言葉の見方考え方に気付きながら伝えようとしている。【主体的②】</p>

6、成果と課題

本実践における成果は、「自分の世代だけでなく秋篠川の魅力を未来へつないでいこうと考え行動する。」という、【世代間の公正】を1年の学びを結び付けながら、考えることができたことである。

それを可能したのが、川柳だと考える。川柳は5・7・5の短い文体である。短いからこそ、自分が伝えたい思いが明確になる。また、他の川柳との比較が容易であり、自分の思いがさらに深まるきっかけにもなった。さらに、簡単に作成できるが故、何度も繰り返し作ることができた。このことで、川柳が洗練されるとともに、秋篠川に対する思いも同様に洗練されてきたように感じた。川柳は、児童が書くのみでなく、地域の方や保護者から川柳を書いてもらう活動も行った。同じ地域に住んでいるが世代の違う人と自分たちの川柳と比較できたことも大きな成果としてあげられる。

地域の方の川柳に、「秋篠の 川でおよいだ むかしわね」というものがあった。この川柳を読み子どもたちは、驚きの表情を見せていた。地域の人に実際に来て昔の話して頂くのも良いが、川柳として交流することで、秋篠川への想いの違いがより明確に理解できたと考えられる。また、保護者からの川柳には、「秋篠の 川を守ろう みんなでね」というものがあった。「保護者も僕たちと同じ思いなんだ」という世代が違ってても思いは同じという視点に気付かせることができた。地域の方や保護者から集めた川柳は50を超える。たくさんの思いが地域には存在することに気付いた児童が、平城地域を未来へつなぐ担い手として、活躍してくれることを期待したい。

多くの人の思いに気づき、感じることもできた一方、具体的な活動につなげることができなかったことが課題としてあげられる。川柳で共有することのできた思いをどのように広げるのか。どのように秋篠川を未来へつなぐための活動をしていくのかに対しては、まだまだ様々な手立てが考えられる。

しかし、実際に1年間学習を続けてみて、1年間ですべてを網羅することは、時間的にも非常に難しいと感じた。もし、行動を伴う学習をするならば、小学校の6年間という単位で考えてみたり、他学年との共同実践を行ったりするなど、1年間では収まらない学習活動を計画することも考えていく必要があるだろう。児童が、未来へつなぐ一歩目を踏み出せたように、私たち教員も地域の学校としてどのような活動ができるか考えを深めていきたいと感じる実践になった。